【液状化対策事業】

✧ 木曽岬町複合型施設工事　　2015 年 10 月初旬から着工

✧ 弥富市新庁舎建設基本設計（案）がまとまりました。（近々発注）

✧ 名港ポートアイランド活用。（リニア開通を目途）

✧ 名古屋市で、東海・東南海地震が起きた場合、液状化の高い地域は名古屋市の南西側の港区、中川区、南区周辺、天白川流域に集まっています。また、三重県・岐阜県・静岡県等も液状化対策に力を入れています。（今年度から順次）

株式会社　サンケン

木曽岬町複合型施設基本構想

平成24年2月

木　曽　岬　町

■木曽岬町複合型施設基本構想　01

◎はじめに

木曽岬町内の各公共施設について、規模、年数、使用状況等の現在の状況を踏まえ、今後必要とされる施設の建設やあり方について、総合的な検討を行うことが必要です。
現在の庁舎は、耐震性はじめ、防災拠点としての機能不足等の、施設の老朽化の問題を抱えます。この点を踏まえ、役場機能と合わせた防災拠点としての機能、生涯教育施設、集会施設等の機能を併設することを視野に入れた、複合的な施設構想が必要な時を迎えています。
そこで、木曽岬町の公共施設と現庁舎について、それぞれどのような問題・課題があるのかを検証します。

◎木曽岬町の公共施設の問題点

1）町民のニーズに応えられていない、不足している公共施設

第４次総合計画後期基本計画の町民アンケートで、高齢者福祉の充実や児童福祉・子育て支援の充実を望む声があるように、町の公共施設は不足していると言えます。例えば、図書館は、図書室程度の規模の施設はあるものの、いわゆる「地域図書館」というような、町全体の中心的な存在となる施設がありません。町民の中には、近隣の市町村の図書館を訪れる人もいます。
非日常的な生活に彩りを与える施設についても、整備が不十分です。演劇や映画、あるいは講演等のイベントを行える、ホール等の大きな空間がありません。大地震等の災害時の際には、避難施設に活用できる施設ですが、現状はない状況です。

2）町内の手狭な公共施設

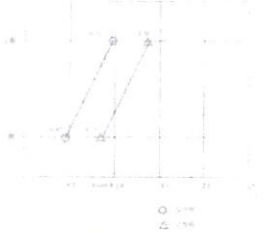
町の公共施設は、手狭な状況が見受けられます。北部公民館は一部を図書室に使用しており手狭な状況です。子育てサロンや高齢者の談話室等は、福祉教育センター１階の集会室やロビーを間借りしており、手狭な状況です。同時に、施設の用途に特化した空間でもありません。
本件の複合施設を構想することで、これらの施設が、広々と有意義に活用できる可能性が考えられます。

◎現在の庁舎の問題点

1）耐震性能の足りない庁舎

現庁舎には、耐震上の問題があります。
公民館を転用した現庁舎は、S47 年竣工の施設であり、耐震診断の結果（表 1-1）、最も低い Is 値（注 1-1）が 0.45 であり、安全基準とされる 0.8 を大きく下回ることが判明しています。大地震等の災害時においては、庁舎としての役割を果たせない可能性があります。

表 1-1.
現庁舎の耐震診断結果（Is 値グラフ）（H10）



2）時代に対応していない庁舎

現庁舎は、全体として、バリアフリー（注 1-2）な施設づくりが不十分な状況です。特に、EV（注 1-3）が１つもない点、多機能 WC（注 1-4）が不足している点、狭く、手すりの設置が不十分な廊下や、至る所にある段差等、町民の誰をも受け入れられない状況が見受けられます。

図 1-1. 閉鎖的な現庁舎の外観

また、近年の情報公開をはじめとする、町の透明性の高い建築表現としてのオープンな施設環境づくりの流れに対して、狭い中廊下や小さな空間が集まっている庁舎窓口の配列は、閉鎖的です。（図 1-1）

注1-1. ＩＳ値　：　耐震指標（国土交通省　告示　平成１８年　第１８４号）
注1-2. バリアフリー　：　身体障害者や高齢者が生活を営むうえで支障のないように建物を設計すること（広辞苑）
注1-3. ＥＶ　：　エレベーター
注1-4. ＷＣ　：　トイレ

◎現在の庁舎の問題点

3）防災拠点としての庁舎

最近の大震災の例に見られるように、現庁舎は、先に述べた耐震性能の不足はもとより、津波対策が不十分な状況です。右図（図2-1）に示すように、現在の庁舎付近は、大地震時における津波により、約２m以上浸水することが、想定されています。治水を管理する排水機集中管理機はじめ、サーバー（注2-1）等が被害を受ける可能性があります。
自家発電設備等の自立した防災機能を有しておらず、電気・通信・水道等のライフライン（注2-2）の途絶に対応出来ていない状況です。

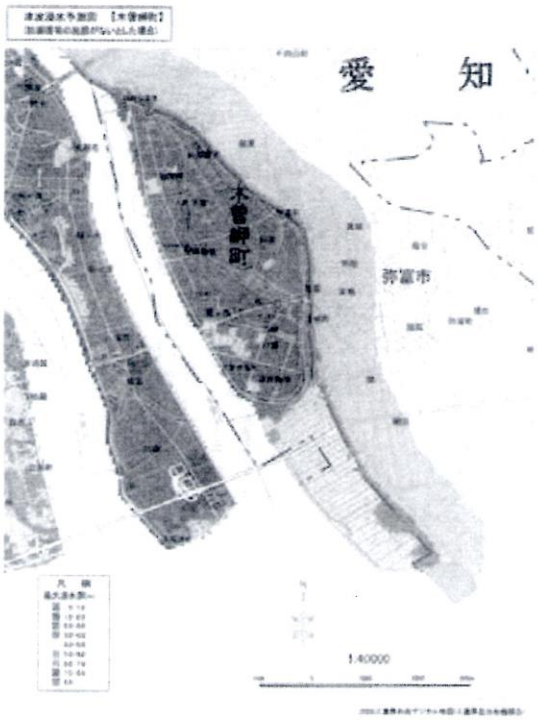


図 2-1. 木曽岬町の津波浸水予測図（H23.10 月速報版）
（出典）三重県ＨＰ 防災みえ.ＪＰ

4）業務スペースが不十分な庁舎

現庁舎がもともと、公民館を転用したものである為、庁舎全体が狭く、且つ、小さな空間の集まりで、広々とした一室空間ではありません。現在は、庁舎と福祉センターに、執務スペースが分散しており、職員の横断的で、一体的な繋がりが築きにくい状況です。

また、行政サービスの需要拡大に伴う、パソコン機器等の増加により、事務室のスペースが狭くなってきています。その他、書庫のスペースを十分に確保できない状況が、事務の作業スペースをより狭くしています。
また、コンクリート壁が至る所に点在しており、改修が困難で、上記の問題点を解消しにくい状況です。

5）町民サービスが不十分な庁舎

町民が利用する窓口が、１階・２階に分散しており、不便で利用しにくい状況です。
また、建物全体を見渡し、把握できるホールのような、広々とした統合空間がない為、町民にとって分かりにくい環境です。
狭い中廊下を始め、低い天井高、開口部の少ない閉鎖的な施設の作り方が、上記の問題点を強調しています。（図2-2）

図 2-2. 閉鎖的な現庁舎エントランス

注2-1. サーバー　：　ネットワーク上で他のコンピューターやソフト、すなわち、クライアントにサービスを提供するコンピューター（広辞苑）
注2-2. ライフライン　：　都市生活に不可欠な水道・電気・ガスなどの供給システム（広辞苑）

◎複合型施設建設の基本コンセプト

基本コンセプト（注3-1）を考える前に、木曽岬のアイデンティティー（注3-2）を探求します。

1）広がる空、伸びゆく田園の美しい風景

町全体の多くが田園であり、集落の家々が連なり、高層の建物がない、空と田園が伸び広がる美しい風景があります。

2）木曽三川の歴史と輪中集落の連なり

木曽三川の治水の歴史そのものが、輪中という具体的な農村形態として出来た町、それが木曽岬町です。（図3-1）輪中の集落の形式は、皆が手と手をつないで農村を守る、その理念の美しい具象として理解できます。石垣の基壇の上に築かれる住宅の風景が連なる木曽岬の町並みは、歴史的で未来にも誇れる、この町のアイデンティティーです。

反面、大地震や津波の際には、浸水や洪水に常におびやかされる事になります。しかし、歴史上創られてきたこれらの負の要素に対する人間の知恵は、この町の風土・風景と強く結びつき、町として未来に誇れる財産です。

図3-1. 木曽岬町一部の航空写真
輪中集落が連なって出来た町であると想像できる町の構造

■コンセプト

これまでに記した、木曽岬町の公共施設の問題点、現在の庁舎の問題点、木曽岬の誇れる魅力・アイデンティティーをコンセプトに結び付けます。

①）木曽岬町の核づくり

庁舎をはじめ、図書館、町民ホール等を複合施設として一体的に計画し、町民の誰もが集い憩う、木曽岬の中心施設「木曽岬町の核づくり」を目指します。

②）木曽岬町の防災拠点づくり

地震・津波をはじめとする災害等の際に、対策本部となって指揮命令の役割を担う、耐震性・安全性に優れた、町民の安全を守る施設「木曽岬の防災拠点づくり」を目指します。

③）快適な行政サービスづくり

庁舎の窓口部門をはじめ、図書館、町民ホール等を１ヶ所に集約して、行政サービスや業務効率の向上を図る、誰もが満足できる快適な行政サービスづくりを目指します。

④）木曽岬町らしい愛着の湧く施設づくり

美しい風景である輪中にならった作り方で、木曽岬町の風土を感じさせる施設づくりを目指します。

⑤）既存施設の有効利用を図る施設づくり

既存施設の改修等による有効利用を念頭に置き、新設施設との連携を図って、無駄のない合理的な施設づくりを目指します。

⑥）木曽岬町民との協働施設づくり

本計画により、新たなコミュニティー（注3-3）形成への発展が期待出来ます。構想段階における町民との議論・交流を通して、町民との一体感が生まれることを目指します。

注3-1. コンセプト　：　企画などで、全体を貫く統一的な視点や考え方（広辞苑）
注3-2. アイデンティティー　：　ある人の一貫性が時間的・空間的に成り立ち、それが他者や共同体から認められていること（広辞苑）
注3-3. コミュニティー　：　一定の地域に居住し、共属感情を持つ人々の集団。地域社会。共同体（広辞苑）